

第37回 動労全国大会

また去、片肺執行部



81. 7. 21
No. 798

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五(六)公衆(器)七二〇七

「本部」反動分子のセクト支配を拒否

六名の不当逮捕者奪還へ向けた闘いが連日、全支部で闘い抜かれていく。津田沼支部は全組合員の泊り込み体制の中で、差し入れ、家族への連絡、職場での諸々の闘いを展開し、拘置所に対する宣伝車での終日の激励行動、弁護士接見獲得の闘いなど各支部からの動員体制をもって貫徹され、全支部では抗議闘争と併行し、署名・カンパの取り組みが展開されている。

動労千葉は、この政治的・不当逮捕攻撃を真向うから受け止め、反撃し、粉碎することを通して、さらに強固な組織体制を打ち固めつつある。

一方、権力に身も心も売り渡した「本部」反動分子は、第三七回全国大会で、またまた片肺執行部に追い込まれたのはじめ、ますます破産を深めている。

相変わらずの暴力支配の体質

大の特徴点である。

さらに拡大された組織不信

七月十四～十八日、箱根で開催された第三七回全国大会では、水本謀略・反ファッショ統一戦線推進と三五万人体制屈服を基調とする本部方針への翼賛演説で押し通そうとする反動分子に対し、「告訴などで権力の手先になるべきではない」「55・10確認事項は認められない」とする良心的、戦闘的代議員の発言が果敢に展開された。しかし、全体としては「ストライキをやれば何でも解決できる」という幻想を組合員に持たせてはならない。……八一春闘はストライキをやらないから敗北した」などというセクト的立場からの支離滅裂な翼賛演説に多くの時間を浪費し、代議員、傍聴者の失望、組織不信をさらに拡大する大会となった。

暴力的締めつけの中で、方針や決議を強引に押しつけても、組合員の心は「本部」反動分子からさらに離れ「もの言わぬ組合員」が圧倒的に増大している。

「本部」反動分子の必死の策動にもかかわらず、再度片肺執行部に追い込まれたという事実が、何よりも雄弁にこのことを物語っている。

また、動労全国大会に対する社会的関心ということについては言え、動労も減量経営」というマスコミの見出しに見られるように、動労の闘争方針についての社会的関心が全くないということも、第三七回大会の大きな特徴である。

つまり、「動労の出す方針はもうわかっている。それはセクト方針だ」ということである。同時期に開催される他単産の大会が、右であれ、左であれ、その方針、路線について大きく関心を集めていることと比べ、極めて対象的である。

動労大改革へーさらに前進しよう

三五万人体制への屈服により、動労組合員数が「八三年には三万人台に転落する」ことも必至であり、もはや、「本部」反動分子の路線的、組織的、財政的破産はかくしよりのない所まできている。

動労大改革をかかげた動労千葉の闘いの正義性は、この第三七回全国大会の全過程を通じて、ますます鮮明である。

権力の手を借りなければ動労千葉と対決できないところまで追い込まれた「本部」反動分子を、六名の不当逮捕者奪還一起訴策動粉碎の当面する闘いを軸に追撃しよう。

このような中で、「本部」反動分子の「結成三〇周年」を名目とするジャンジャン大会策動が完全に破産したということが第三七回全国大会の最

労運研不参加 片肺状態続く

動労執行部

国鉄動力車労働組合(動力車)委員長 長 四方幸人(は神奈川県相模原市)は第三七回全国大会最終日の十八日、①民間先行の統一をめざす統一推進会の「基本構想」に反対し、②組織体制を維持し、

動労全国大会を報ずる
7月18日(夕)付「朝日」新聞

事務局長案を「基本構想」に盛り込ませる。8・15や、10・21の反動分子に積極的に参加する。③組織体制を維持し、職員に働きかけたものの、役員や大会代議員の削減など、組織体制を整備する。……このことを含み、これから一年間の運動方針を定め、八級委員長の新執行部を選出する。また、新執行部は、減量による再任した八級委員長以外の三役は次の通り(いずれも新任)。

長 坂石瑞夫(組織部長) 書記 記長 佐藤松(副委員長)